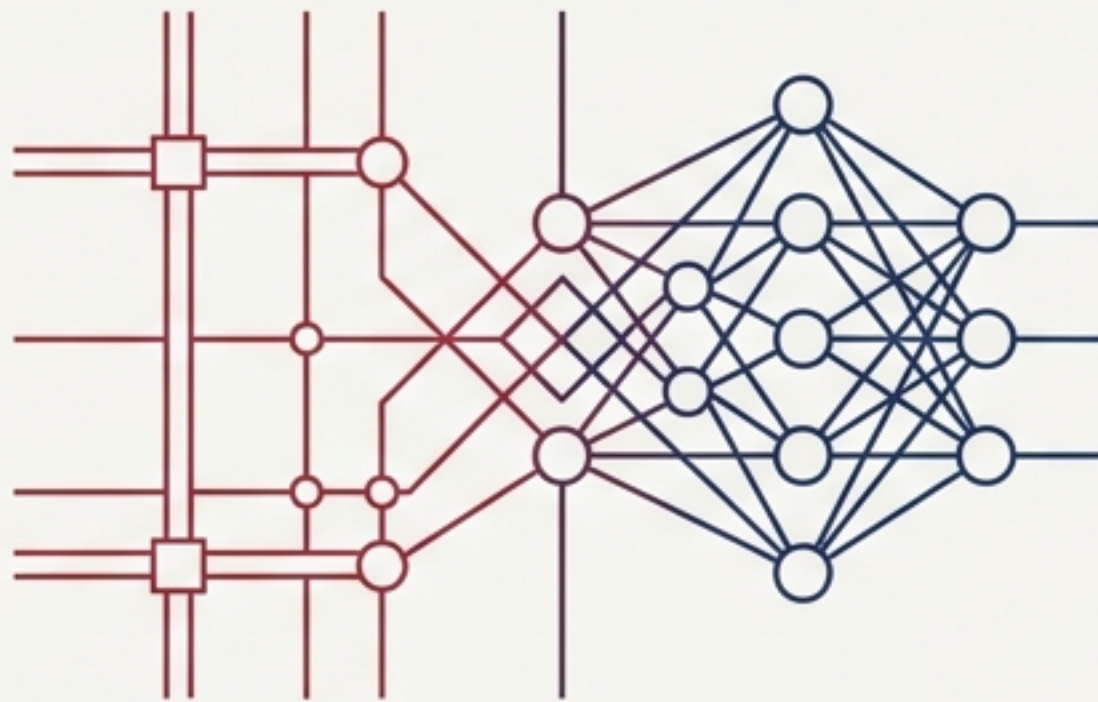


誇張された脅威論を排し、日韓LLMエコシステムの構造的現実を解き明かす

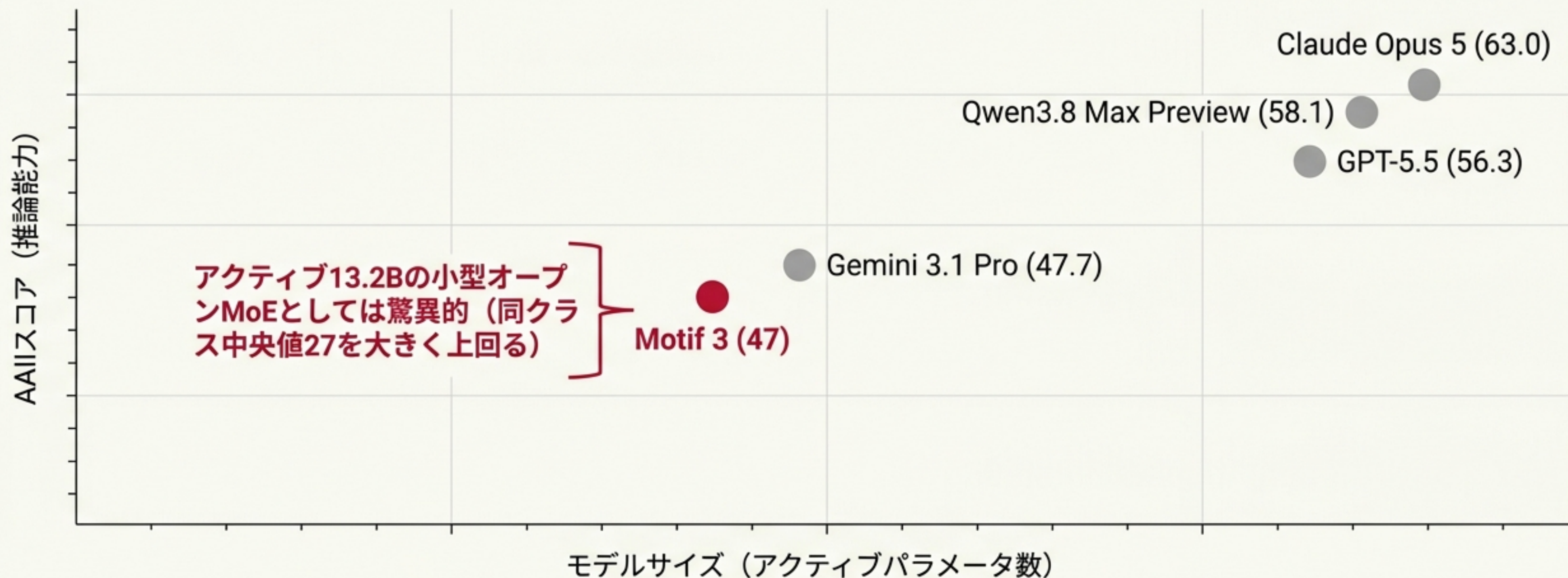
Motif 3の現実と、日韓ソブリンAIの構造的格差

グローバル指標の空白が意味するものと、日本が取るべき次の一手



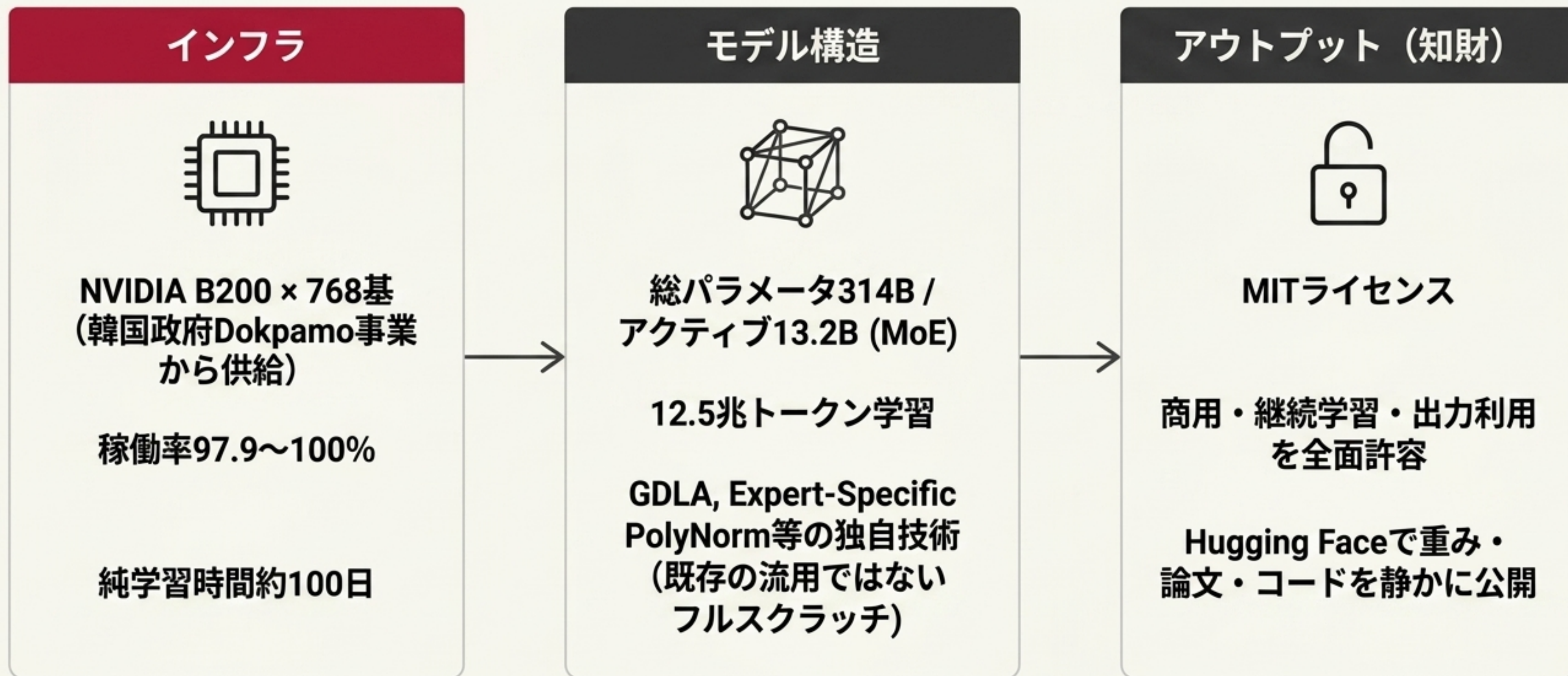
表面的なベンチマーク競争の裏にある「国家の資源配分」と「知財戦略」を解剖する。

Motif 3の「世界トップクラス入り」は誇張だが、極めて高効率な特化型モデルであることは真実である



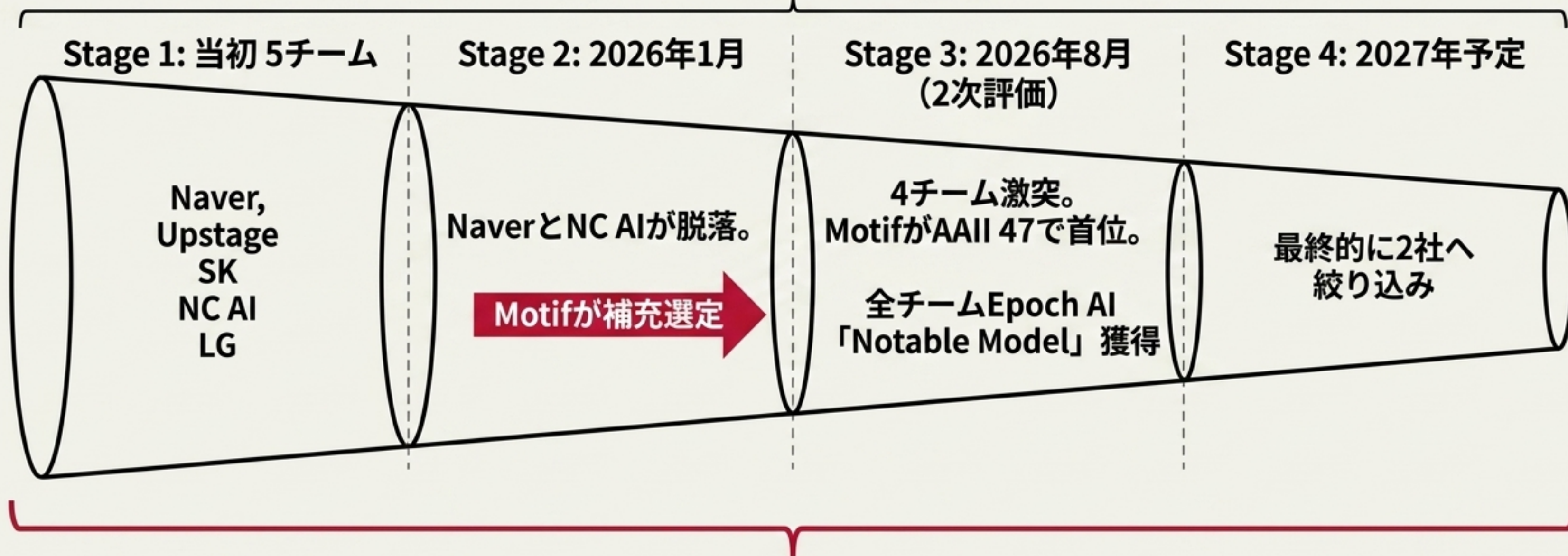
結論：真のフロンティアには10～16点及ばないが、グローバル上位10%に位置する『フロンティアに肉薄する高効率オープンモデル』として評価すべき。

Motif 3の競争力は、完全自社設計のアーキテクチャと圧倒的な最新GPUインフラによって支えられている



韓国政府は「フルスクラッチ」を条件に、資源を少数の勝者へ集中投下する サバイバル設計を採用している

Dokpamo（独自ファウンデーションモデル）事業：予算約2,136億ウォン



1社あたり500～768基のNVIDIA B200を政府が直接供給する
「勝者総取り（Winner-takes-all）」の構造。

国産NPU構想を妥協してでも、最新のNVIDIAインフラによる「モデル層での主権獲得」を優先する韓国のプラグマティズム

理想（イデオロギー） / 国産NPU神話

- ① 親会社Morehが掲げた「NVIDIA/CUDA依存からの脱却（AMD路線の推進）」
- ② 国家AIセンターにおける「国産NPU設置義務」

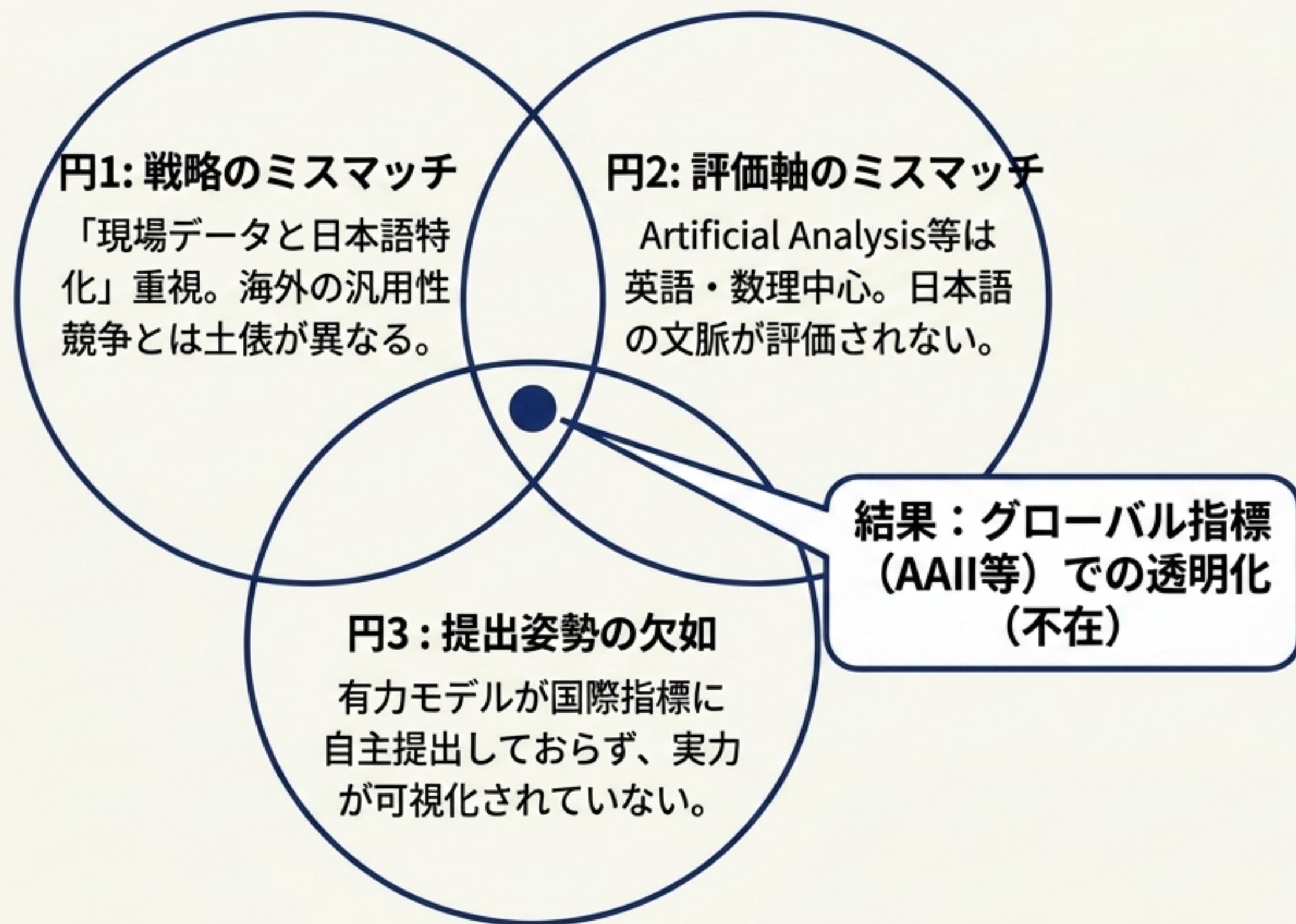
妥協と転換

現実（プラグマティズム） / B200への回帰

- ① Motif 3はAMDではなく、政府供給のNVIDIA B200で学習。
- ② 国家AIセンターは入札不調を経て「国産NPU義務条項」を削除。

インサイト：ソブリンAIの本質はハードウェアの出自ではない。NVIDIAチップに依存してでも、自国製モデル（オープンウェイト）をデファクト化し、国内の推論需要を囲い込むことが真の主権であるという韓国政府の割り切り。

日本勢がグローバル指標に不在である理由は、 絶対的な技術劣位ではなく「三重のミスマッチ」にある



厳しい現実

ただし、日本語限定の「Nejumi Leaderboard 4」でも上位50位に日本産が不在（海外勢が優位）という厳しい事実もあり、汎用推論力の底上げは急務である。

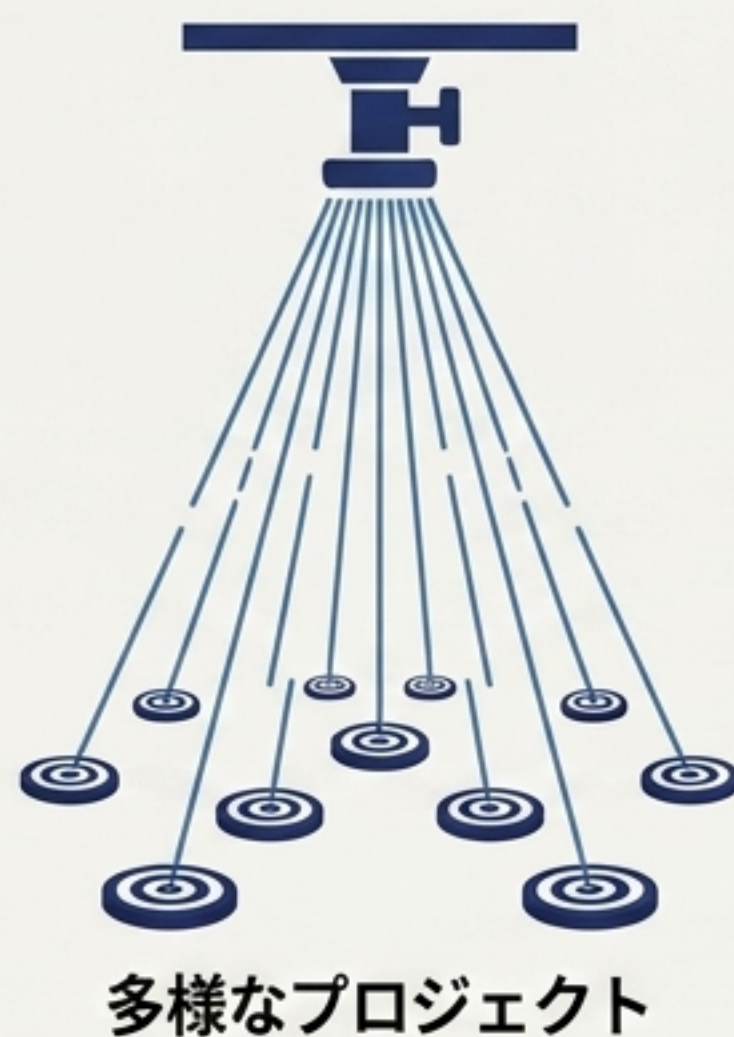
資源配分モデルの違い：韓国の「レーザー集中型」対日本の「スプリンクラー分散型」

韓国：集中と選別



- **投資規模**
200兆ウォン超のR&D投資計画、26万基のGPU確保。
- **配分手法**
国家成長基金が単一企業に数千億ウォン規模を投下。
- **特徴**
トーナメント方式、勝者への圧倒的リソース集中。

日本：広く薄い支援



- **投資規模**
GENIAC第4期における計算資源利用料の補助。
- **配分手法**
予算を分割し、16件のプロジェクトを同時採択。
- **特徴**
エコシステム全体の多様性確保。しかし単体での突破力は分散。

日韓LLMエコシステム構造比較：戦うレイヤーと目的の根本的な相違

	韓国（Dokpamo）	日本（GENIAC）
目標設定	フルスクラッチによる国家代表モデル・グローバル上位への肉薄	産業現場データのAI-Ready化と社会実装・特化領域での価値創出
計算資源	政府によるB200等の直接供給・集中投下	利用料補助ベース・複数プロジェクトへの分散支援
評価指標	AAIIなど英語圏中心のグローバル指標を重視（二次評価配点の40%）	Nejumi 4などの日本語特化指標、および実務ユースケースでの検証
エコシステム	財閥系企業（Samsung, SK, Naver等）と半導体産業の密接な連携	独立系スタートアップ、メガベンチャー、通信キャリアによる分散型開発

ソブリンAIの知財パラドックス：標準化を狙う韓国と、ドメイン知識を保護する日本



韓国の「オープン・エコシステム」戦略

- アーキテクチャ（GDLA等）の論文・コードを全面公開（MITライセンス）。
- 特許による囲い込みよりも、影響力の獲得・人材吸引・グローバルにおける「デファクト化」を選」を 선호。



日本の「ドメイン・エンクロージャー」戦略

- GENIAC第4期が示す「産業現場データ×特化モデル」路線。
- アーキテクチャの全面公開はコモディティ化を招くため、データ資産、後処理（RLHF）パイプライン、営業秘密をコアIPとして保護・囲い込み。

インサイト：日本がグローバル指標で目立たないのは、戦うレイヤーを「汎用アルゴリズムの公開競争」から「現場データの秘匿化と特化活用」へシフトさせている必然的結果である。

アクションプラン 1&2：評価軸の二重管理と、実力の戦略的可視化

評価軸の二重管理と用途別選定

【即時】

汎用推論（コーディング/論理）は海外フロンティア（Claude/GPT）に委ねる。

国産モデルは「データ主権・オンプレ運用・特化領域（金融・医療）」の基準で選定。

再評価の閾値：国産モデルがAAII 40超、またはNejumi総合トップ20に入った時点。

国際指標への提出と「可視化」のハック

【短期】

日本の有力モデル（PLaMo 3.0, Sarashina等）をArtificial Analysis等へ積極的に提出する。

「可視化」されなければ投資も人材も集まらない。韓国がEpoch AIの「Notabble Model」認定を国家PRに活用した手法をベンチマークすべき。

アクションプラン 3&4：資源の「選択と集中」、そして現場データのコアIP化

【中期】

計算資源の選択と集中

- 「薄く広く」から、韓国型の「トーナメント型集中投資」への部分的転換を検討。
- 警告：ただし、韓国における「勝者総取り批判」や、評価者と投資家の利益相反といった副作用は反面教師とする。

【知財戦略】

オープン化と特許の明確な使い分け

- アーキテクチャの安易なオープン化を避け、「産業現場データ×特化モデル」の差別化領域で特許・営業秘密による囲い込みを徹底する。
- 日本のコアIPは、モデルのパラメータそのものではなく、「データ資産」と「後処理/強化学習パイプライン」に設定する。

今後2年間で注視すべき、日韓LLMエコシステムの4つの先行指標

指標 1: Dokpamo最終決戦（2027）



韓国政府事業の最終2社への絞り込み結果と、Motifの存続可否。

指標 2: Motif後継モデルの推移



Motif 3に続くモデルが、AAIL等の指標でフロンティアとの差を縮められるか。

指標 3: GENIAC成果の国際デビュー



日本の第4期成果モデルが、国際指標（Artificial Analysis等）へ登場するか。

指標 4: Nejumi 4 上位奪還



日本産モデルが、日本語特化リーダーボード（Nejumi 4）の総合上位20位へ食い込めるか。

結語：日本の勝ち筋はグローバル汎用競争の追従ではなく、独自の強み（現場データ・特化知財）を活かした非対称戦にある。